

西安都市文化と朝鮮・日本

中国・西北大学と 初の国際学術シンポジウム

研究発表24報告に活発な論議



今夏、本学との国際交流協定校である西北大学(中国西安市)で、同大学との初の日中国際学術シンポジウムが行われ盛況だった。両大学から80人の研究者が集い、24報告が展開されたその模様を、団長を務めた矢野建一文学部教授(人文学科長)が報告する。

日中国際シンポジウム「長安都市文化と朝鮮・日本」は、8月29日、中国陝西省西安市の西北大学で開催された。中国各地から80人を超える研究者が出席し、会場となった国際会議場は立すいの余地もないほどであった。

李浩西北大学文学院長の開会宣言に続き、西北大学を代表して恵浹河西北大学副学長、また日本側報告者を代表して文学部の矢野が挨拶に立った。

研究発表は午前・午後の4セッションに分かれ、日本から7本、中国からは17本の報告が行われた。その要旨は、すでに『中日長安都市文化と朝鮮・日本』(中国語版)として公開されているので、ここでは日本側の報告を中心に討論の概略を紹介する。



第1セッションは、亀井明德文学部教授の「唐三彩陶からみた日唐交流史の研究」と、皆川雅樹文学研究科博士後期課程3年次生の「鸚鵡の贈答—日本古代対外関係史研究の一齣」の2報告と中国側の5報告がなされた。両報告とも「物」を媒介とした日中交流論であったことから、それぞれの物のもつ特質と交流の関係をめぐって、活発な論議が展開された。

第2セッションには、小山利彦文学部教授の「男踏歌考—中国・日本そして源氏物語における」と、高野菊代商学部兼任講師の「唐代における漢詩解釈の日本での受容—『源氏物語』初音巻における明石の御方の手習歌と漢詩文との関連性」の2報告と、中国側から計6本の報告がなされた。中国側の報告も文献の伝来に関するものであったことから、両国の文献資料研究の現状やその刊行状況をめぐる発言が相次いだ。

第3セッションは、矢野の「日本古代における郊祀と謁廟の礼」と、中国側からは長年長安城の調査研究にたずさわってきた李健超西北史研究所教授の「空海と長安」など4報告がなされた。儀礼空間としての長安城、空海など外国寄留学者の居住空間、その言語と文芸の受容度など、本シンポジウムのテーマに即した報告に、活発な討議がなされた。

第4セッションでは、原豊二米子工業高等専門学校専任講師の「源氏物語と儒学者—林羅山・熊沢蕃山をめぐって」と、巖基珠ネットワーク情報学部助教授の「朝鮮本『薛仁貴伝』の形成様相」2報告、および中国側から6本の報告がなされた。原報告の儒学者の源氏学という新しい視点と、中朝交流を視野に入れた巖報告に、参加者は熱心に聞き入った。

日中あわせて24本という膨大な報告にもかかわらず、最後まで席を立つ参加者は見られなかった。専修大学・西北大学をキーステーションとする初の本格的日中国際学術交流シンポジウムとしては、十分な成功をおさめたといえる。この成功の陰には、昨

夏、土屋昌明経済学部助教授・前川亨法学部専任講師・巖助教授と西北大学文学部による研究会議が行われたこと、李浩教授が昨秋来日し、今回、参加はかなわなかったが荒木敏夫文学部長、松原朗文学部教授、そして中国語教授陣との綿密な打ち合わせと周到な準備があったと聞く。なかでも日本側の幹事役の土屋助教授の奮闘には、この場を借りて謝意を表したいと思う。また会場・宿舎のみならず見学先における便宜など、西北大学のさまざまなご配慮にも、お礼を申し上げなければならない。

来年の夏には会場を専修大学に移し、新たな日中シンポジウムが開催される。関係各位のご理解とご協力を切にお願いして、報告にかえたい。

※追記 最終日(9月1日)に見学した奈良時代の「遣唐留学生の墓誌」は、10月11日以後のマスコミ報道でも明らかなごとく、驚愕すべき存在であった。両大学による共同研究プロジェクトを立ち上げたが目下、来春の緊急シンポジウムの開催に向けて準備中である。(シンポジウムの詳細は決定次第、本紙及びホームページでお知らせします)。

【ニュース専修2004年10月号1面】

法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム

「教育高度化推進プログラム」に採択される

文部科学省の新規事業、法科大学院など専門職大学院が取り組む優れた教育プロジェクトを支援する「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」の「教育高度化推進プログラム(事業規模の年間金額上限なしの大型プロジェクト)」に、本学法科大学院が主幹校となり、中央大学法科大学院及び鹿児島大学法科大学院が参画し、共同で申請した「知的財産に関する先端的映像教材の開発」が選ばれた。支援は今年度から3年間継続される。(申請127件・採択63件)

プロジェクトは、法科大学院における知的財産及びそれに関連する法領域の教育内容・方法の開発と充実に取り組むもので、海外のロースクール等における教育体制を参考にしつつ、映像・音声等による教材の開発を推進し、理論と実務にまたがる最新の視聴覚教材の完成を目指す。

【ニュース専修2004年10月号1面】

この記事は2004年10月現在のものです。現時点で募集はすでに終了しています。

日高学長との座談会参加者募集 (募集は11月15日で終了しました)

日高学長と専大でのキャンパスライフについて語り合いませんか？

参加希望者は「私の専大ライフ」をテーマにした800字程度のレポートを送付してください。夢に向かってあなたが「専大」で頑張っている様子を学長に伝えてみましょう。

(レポートには学籍番号・氏名・住所・電話番号を明記のこと。参加決定者には広報課から詳細を連絡します。)



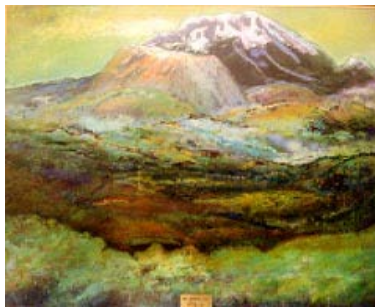
<座談会の様子はニュース専修1月号および本学ホームページに掲載します。>

■座談会開催日時	12月4日(土)10時30分～12時30分
■場所	神田キャンパス
■対象	学部生・大学院生
■募集人数	10人
■締め切り	11月15日

■レポート送付先・問合せ先	〒101-8425(専用郵便番号)広報課 電話 03-3265-5819 ※ 持参の場合には学生生活課(生田・神田)二部事務課窓口まで
---------------	---

【ニュース専修2004年10月号1面】

キャンパス探訪 <20> アートの旅



「季の映り」

群馬、長野県境の浅間山(2568^米)が9月1日、中規模の噴火を起こした。21年ぶりで、その後も小噴火を断続的に繰り返し、首都圏に降灰もした。自然は、何を怒っているのか。麓に広がる浅間高原、軽井沢と、豊かな自然の避暑地に恵まれながら。キャンパスに描かれた「季の映り」(浅間山)は、紫色の巖に残雪、前景の裾野には、溶岩の暗色にかぶさるように新緑が覆っていく。早春の、希望にみちた、壮大な自然が広がる、150号の大作である。「山笑う」(季語)季節である。山にも「怒り」「笑う」表情がある。

画家は本学OBの細川富士雄氏(昭40^経)で、光陽会会員。平成9年に寄贈され、生田校舎8号館1階ロビーを飾る。

【ニュース専修2004年10月号1面】